第61回日本神経眼科学会総会
ランチョンセミナー4

日時：2023年12月2日（土）12:30～13:30

会場：第2会場（ベルサール新宿グランド 5F Room A-D ）
東京都新宿区西新宿8-17-3

免疫性神経疾患における B細胞除去療法の特徴

座長 **敷島　敬悟 先生**
東京慈恵会医科大学 眼科学講座

演者 **千原　典夫 先生**
神戸大学大学院医学研究科 内科学講座脳神経内科学分野

千原　典夫 先生

多発性硬化症(Multiple sclerosis:MS)と視神経脊髄炎スペクトラム障害(Neuromyelitis optica spectrum disorders: NMOSD)は共に中枢神経系の免疫性神経疾患であり、B細胞除去療法が保険適応となっている。一般に、MSと比してNMOSDの視神経炎は重篤で、一回の発作で失明に至ることもある。両者の病態にB細胞が深く関わることが明らかになってきたが、各疾患におけるB細胞の役割は異なる。MSではT細胞に対しての抗原提示細胞としてのB細胞が重要とされる。

また、二次性進行型における髄膜上のリンパ濾胞様構造は神経障害進行との関連が報告されている。一方で、NMOSD病態のコアとして、アストロサイトに発現する水チャネル、アクアポリン4(AQP4)を標的とした自己抗体を産生する末梢リンパ組織の免疫背景がある。NMOSDには他の自己抗体が関連する自己免疫疾患の合併も多い。MSとNMOSD病態におけるB細胞の役割を理解することは、両者の診療に役立つのみならず、他の免疫性神経疾患の治療戦略にも応用できる可能性がある。

本講演ではNMOSD診療を中心に免疫性神経疾患におけるB細胞除去療法の特徴について概説する。

共 催：第61回日本神経眼科学会総会
田辺三菱製薬株式会社 育薬本部 メディカルアフェアーズ部